

2020年1月 国際放送番組審議会

2020年1月のNHK国際放送番組審議会（第665回）は21日（火）NHK放送センターで8人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「A Stranger in Shanghai」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	神馬 征峰	(東京大学大学院医学系研究科 教授・国際地域保健学教室)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
委員	木山 啓子	(特定非営利活動法人 ジェン 理事・事務局長)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)

(主な発言)

< 「A Stranger in Shanghai」

- － Part 1 (12月28日(土) 8:10 ほか)
- － Part 2 (12月29日(日) 8:10 ほか) について>

○ われわれ日本人は芥川龍之介がどんな人物であるかは承知の上で見ていると思うが、海外の人が一般的にどこまで理解しているのか少し気になった。特に、芥川がなぜあの時期にわざわざ新聞社の特派員として上海に渡ったのかということについて、単に中国の文学、古典に造詣があり、昔から関心があったということだけで、渡航の動機が十分説明されているのかと気になった。

激動の時期を迎える中国の様相がいろいろ客観的に描かれており、芥川の間を通して書かれたことが再現されている印象を受けたので、それは非常に好感が持てる。

上海での滞在時間がだんだん長くなり、特にPart 2では、心理的に思いつめられていくような神経質さが表れていることに、非常に感心した。

○ 非常に興味深く視聴した。12月30日(月)に放送された日本語版のタイトルは「ストレンジャー ～上海の芥川龍之介～」(総合、BS4K、BS8K 21:00 放送)と芥川の名前が入っているが、英語版のタイトルは「A Stranger in Shanghai」で、芥川の名前がない。なぜ副題に芥川の名前を入れなかったのか尋ねたい。

映像は非常にきれいで、1920年代の上海の混沌とした様子、雑多な感じ、非常にエネルギーはあるけれども退廃的な面もあるという時代の空気感というものを、非常によく捉えて再現していたと思う。ストーリーが芥川の紀行文「上海游記」に基づいて作られていると思われ、ところどころ文も出てくるが、それが「上海游記」からの引用であるのか、そうでないのかが若干わからなかったので、この滞在を踏まえて書かれたものを引用していることがわかるようにするといいいのではないかな。

さらに、日本語版では「実話をもとにしたフィクションです」と最後にキャプションで出てくるが、英語版はそれがなかったので、フィクションなのか、ノンフィクションなのかがあまり明確でなかったように思う。

芥川の世界観に、おそらくこの上海での4か月の滞在が非常に影響を与えたのであろうということは想像に難くないが、最後のナレーションで、その後、6年後に自殺したことが説明されて、この上海での経験が彼の精神世界にどのような影響を与えたかということについて、もう少し説明があると、上海での滞在意味が深く理解できるのではないかな。

- 途中途中で見出しのように文字が出てくることに関しては、章立てのように、これから次の話が始まるということで、構成として興味深かった。芥川に関しては、もう少し説明してほしいと感じた。

ドラマに登場する差別的な発言や売買春などをどのように捉えて見ればいいのか少し戸惑い、これを国際放送であえて放送する意図を伺いたい。芥川が6年後に自死したことを伝えたことも含めて、どのように結び付けて考えて、どのように捉えて見てほしいという意図で放送されたのか。

- 先に国内向け放送で見ていたが、大変すばらしい出来だという感想をまず持った。渡辺あやさんの脚本が大変すばらしく、上海での撮影もすばらしい出来栄で、当時の政治の混乱というのが非常によく描かれている。この当時の芥川が上海を訪れて何を経験したのかということが、ドラマを通してわれわれも追体験できた。

芥川役の俳優の演技は、神経質な様子はうまく表現されていたが、もう少し突っ込んだ、芥川として彼なりの演技を見たかった。

このドラマを外国の方が見るときに気になるのは、例えば「先生のファンです」と言ったときに、芥川が、「何だろう、羅生門かな、杜子春かな」と言うが、「杜子春」をどれほどみんなが知っているのか疑問だ。「羅生門」は海外では有名だが、それは映画化されたものが有名なので、芥川龍之介という作家について、また、芥川龍之介という作家が主人公になっていることの意義について、もう少し枠づけがあってもよかった。

- 英語版は、日本語版にはないちょっとした説明がドラマの前に付けてあったが、おそらく日本人は芥川龍之介をととてもよく知っているが、海外の方は必ずしも知っている訳ではないので、あのような説明は必要だったと思う。

映像がとても美しかった。当時の上海の様子は、芥川が書いたものを通じてしか知らないが、とても雰囲気が出ており、芥川がさぞショックを受けただろうということも、何となく感じる事ができた。

内容については、実話、芥川のエッセーに出てくる話、あるいは小説に出てくる話と、脚本家の方が考えたフィクションを組み合わせで作ってあるようだが、ルールーというキャラクターと、ルールーが死んだ後のクッキーの話は完全なフィクションではないか。玉蘭というしょう婦が愛人の血を吸ったクッキーを食べるという話はあるが、ルールーに関する話は芥川作品にはないので、それがドラマの中のとても重要な役割を果たしているという構成に少し違和感があった。

- 全体としては、清朝が崩壊した後の大戦間の混乱した中国を、日本人、特に芥川龍之介という非常にみずみずしい感性を持った作家の目を通して描写したところが、非常に魅力的な作品に仕上がっていると思った。魔都と言われた当時の上海の雰囲気再現することにこの番組は非常に成功している。これまでも欧米を含めたいろいろな映画やドラマで、この時代の上海が舞台になってきた。そのような上海を見慣れた視聴者にとっても、この作品に描かれた上海は非常によくできている。しっかりとした時代考証、ディテールまでこだわった町並み、裏路地の風景、登場人物の服装が、それを可能にしたのだろう。

また、キャスティングについても、日本人も中国人もよかった。特に中国側の緑牡丹、林黛玉は混乱を生き抜くたくましさを、玉蘭、ルールーは、セリフはひと言もないが、当時の中国の置かれた状況を、せつなく悲しい表情で見せたと思う。

台詞の英語字幕も、コンパクトでうまく表現されていた。挿入されている英語のナレーションも無駄がなく、工夫された表現だった。全編を通じて流れていたピアノの旋律がドラマの質感を高めていると感じた。

おそらくこのドラマの肝だと思うが、中国人との交流の中で芥川の感性がよく表現されていた。交流を重ねながら、芥川の中国観が滞在中に次第に変化していく様子が描かれている。いくつか印象に残ったシーンがあるが、最初、中国の女性のどこが好きかと聞かれて耳と答えるくだりは、原作でもおもしろいし、ドラマでのやり取りも、軽妙で秀逸だった。中国の現実とは、彼が慣れ親しんできた中国のイメージとは裏腹に、その当時は絶望の淵にある。貧困に苦しむ庶民、章炳麟とか鄭孝胥などの賢人たちの話から、中国の学問、経済、芸術がことごとく墮落していて、わずかな賢人さえも絶望するか奇跡を願うしかなくなっている中国の現実を芥川に認識させていく。そういう過程がよくわかった。

ルールーとの交流というのは、このドラマの見せ場の1つであろう。そのルールーも労働運動の現場で命を散らし、その死の現場で流された血をビスケットで分かち合う。このシーンはやはり鮮烈な印象を受けた。中国の人々との交流を通じて彼の中国への思いがむしろ強まっていったことが、後半のいくつかの場面から伝わってきた。上海に来たばかりの頃は、うるさく感じていた鳴り物が、去る頃は、それがなくても足りなくなるというようなどころまでなじんできたと述べており、最後の場面で芥川は、いつかこの国は必ず起き上がるだろうという言葉に述べている。これは絶望的な現実の中にも、中国になお希望を持っていたことを表しているのだろうと受け止めた。

ドラマは、この6年後に芥川が睡眠薬を服用して自ら命を絶ったことを村田孜郎が淡々と述懐する場面で終わっている。帰国後の芥川の心の葛藤、死に至る経緯には触れていないが、いくつかのヒントが示されている。例えば彼が死の床でまどっていた

のがお気に入りの中国の布でできた浴衣だったこと、また日本の童話の桃太郎の本当の姿は侵略者だということ、これはおそらく鄭孝胥の見方だったが、そういうエピソードが挿入されていることなどがヒントだと思った。そうした点から見て、芥川が自ら生きる希望を絶ったというのは、彼の感性が、彼の願いとは裏腹に迫る日中の戦争を敏感にかき取っていたからだということ、ドラマは言おうとしていると受け止めた。この番組は、芥川がもし今日の上海の林立する高層ビルを見たら何と思うのかというような、そういう想像もかき立てる。視聴者に鑑賞の余韻をふんだんに残す仕上がりになっている。

- 強い印象を受けたのは、映像がきれいだということだ。本当にカラフルで、100年前のあの怪しげな上海を見事に映像化しており立派だと思った。今の上海は高層ビルが立ち並んでいるが、1つ裏通りに入ると、この100年前の景色が今もまだ残っている。決してこれは過去の話でもなく、今もどこかの上海の裏通りには怪しげな、あるいは貧困も含めてこのような世界があるように感じたので、非常に衝撃的だった。

文学としてより、歴史の流れとしてこの番組を見たが、辛亥革命があり、その後、軍閥が割拠するという混乱の極みの中で、外国人は租界で生活をしている。その時代の歴史が、非常によく表現されていると感じた。最後のところで、中国の共産党大会の第1回に毛沢東が出てくるのだが、この番組は時代の転換期を切り取っており、現代中国の原点をみることができるといっても非常に強いインパクトを持った。

タイムスリップしたような感じもするが、現代まで続いている、ドラマというよりはドキュメンタリーのように感じる場所があった。だから、芥川原作との違いについては、あまり気にならなかった。

これは中国と日本の見事なコラボレーションだと思うが、日本側の企画意図に中国の当局が何らかの影響力を行使したのかどうか。あるいは全く、そういうこともなく、脚本をそのまま映像化できたのか。仮に今の中国がこういう番組を見たら何かしら思うところはあるはずなので、何らかの影響があったのかどうか伺いたい。

- 全体を通して気になったのが、喫煙シーンが非常に多いことだ。これをそのまま、例えばタイで見せられるかということ、難しいのではないかな。韓国でも今非常に厳しくなっていて喫煙シーンを放送に出さなくなっている。ほかにも世界のいろいろな国で喫煙シーンを出さないよう、アメに変えたりモザイクを付けたりいろいろな工夫をしている。喫煙シーンに関しては、WHOが2016年に映画やテレビで使わないようにという勧告を出しており、そういう世界の流れも踏まえた上で、外国向けに放送する番組については少し気をつけたほうがいいのではないかな。

国際放送として、外国向けに放送する際、国内放送の番組と違うルールがあるのか。外国向けに放送する場合は別のルールがあってもいいのではないかな。

(NHK側) 芥川について、バックグラウンドの描写がなく不親切だったのではないかなということだが、芥川という人物は、おそらく外国では知らない人が当然多いであろうという前提で英語版を作った。今、世界が注目している中国の100年前の姿を、隣国のとある作家の目線で見っていく物語で、むしろ主役は中国である、というくらいのつもりだった。この時代の中国を描く

と、大抵は政治家、軍人が絡んできたり、日中関係の負の部分みたいなものに触れずにはいられないようなところがあったが、今回は芥川龍之介という1人の作家、文化人の目を通してニュートラルに描くことが出来たのではないか。偶然にも、当時ちょうど第一回中国共産党大会が行われた。つまり、現代の中国の原点となるような転換期に、芥川が旅をしている。彼の目線で描くことで、中国のパワーの源に迫れるのではないかと考えた。

英語のタイトルに「芥川」の名前を入れなかったのも、おそらく外国の方は知らないだろうと考えたからだった。むしろ100年前の中国に迷い込んでしまった単なるストレンジャーという目線で、視聴者にも一緒に旅してもらおうという思いで付けたタイトルだ。

「これはフィクションです」という文言を英語版に入れなかったのは、欧米など海外では、たとえモデルがいてもフィクションはフィクションだということが、日本人よりも共通理解としてあるので、フィクションという表示は普通は入れないことが多いという慣例にならった形だ。

この番組は完全にドラマとして制作したので、脚本家が想像力を働かせてフィクションとしてふくらませた部分に関しては、あくまでも見た方に感じ取っていただくということを優先し、ここまでは現実です、ここから先は違いますよ、というような説明はあえてしなかった。視聴者に100年前の中国と一緒に迷い込んでいただいて、それぞれに感じ取っていただくことを一番に考えて作った。

日本人にはどうしても芥川が自殺したことが予備知識としてあるので、この旅との因果関係が気になるという声は非常によくわかる。この番組を見て、なぜ死を選んだのか、見た人によってそれぞれの解釈が成り立ち、味わう余韻も違うと思うが、作り手としてはそれでいいと思っている。

ルールーは、脚本の渡辺あやさんが創作したオリジナルキャラクターで、作劇上必要な存在だった。芥川が中国語が全くわからない中で異国の地に飛び込んでいる。例えば偉い政治家が何か話していても、芥川は壁に引っ付いているワニの剥製を見るしかない、そういうことの連続だ。そしてルールーも耳が聞こえず、周りが何を言っているのかわからない。文字でしか自分を語れない。2人は少し似た境遇のストレンジャーどうして、漢文を通じて直接コミュニケーションが取れる。全くの異国の地に放り出された芥川が、自分の分身みたいな形で、直接心を通わせ得る人物として発想されたキャラクターがルールーだと思う。ルールーの血に染まったビスケットを食べて、彼の思いや、彼を愛している人たちの思いみたいなものを芥川が受け取って中国観が大きく変わっていくが、ルールーのような特殊なキャラクターがいなくなかなかそこまでの結びつきが生まれづらかった。

日中のコラボレーションの中で中国当局が影響力を行使したかだが、現地のプロダクションと丁寧にやり取りをしながら、撮影許可を得た。特に影響を受けることなく撮影を行った。

(NHK側) そもそもの企画として、今、中国とはいったい何だろうということを描

くことが、1つの企画の発想の原点になっている。そこに非常に有効なキャラクターとして、当時4か月間のルポを行った芥川龍之介という日本の知性を代表するようなキャラクターを置いたことで、政治・軍事というバランスではなく、中国の美しい面、人間の熱量みたいなことを描き出したかった。そこに8Kというテクノロジーが加わり、非常に鮮烈な光、影、色を表現し、100年前の日本人が感じた中国に対するパッションみたいなものを表現できるのではないかと考えた。

この番組は、芥川龍之介のバイオグラフィーではない。芥川というのは、われわれの目に中国の100年前を見せるための1つの触媒、フィルターでしかなく、ある普遍的なもの、100年たっても変わらないものを描きたいというようなことで、当時の芥川が見た風景、見た記憶、そのまぶたのままに今の中国を見たら、今の中国は果たしてどう見えるだろうか。それを映像によって訴えかけたいというのがこのドラマの趣旨だ。

こういう番組を外国で放送することで、われわれ日本人が見る中国とはどのようなものかという疑問が、欧米、あるいはアジアの人にとっても、中国とは何かを考える1つの起点になってほしい。

(NHK側) 質問があった番組を作る上でのルールについては、国内番組基準と国際番組基準の2つがあり、喫煙シーンが多いとか、売買春をどう取り上げるかといった指摘があったが、番組基準に則って作ると受け止めている。今回の場合は、1920年代を描くという意味での演出の一部が、今の時代の感覚から見ると首をかしげるようなものもあったかもしれない。ただ、問題意識としてはドラマの場合でも、最近ドメスティックバイオレンスや、子どもを虐待するというようなものが多いので、例えば昭和の時代を描いているからといって簡単に親が子どもに手を上げるというようなものを軽々しく脚本の中に取り入れるようなことはしないように注意しているし、今後も一層気をつけていきたい。